

特集 「現代フランスにおける文明論」

文明への問い

——先取りした文明学の構想——

齋藤 博

東海大学の文学部に文学学科が設置されていることは国内では少なくとも周知の事実になっている。しかしこの学科の理念として先取りされている文学とはどんなものをいうのか、具体的に文学学科カリキュラムはどのように作られているか、ということになると、文学学科に所属する筆者なども歯切れの悪くなる始末である。カリキュラムはその学科に所属するスタッフと学生との間の厳粛な約束ごとの筈であるが、理念と現実の間の乖離はなかなか埋まっていけないからである。

文学学科の創設以来すでに四半世紀以上の年月が経過している。文学学科生成のこの年月はわれわれ文学学科の関係者にとっては、これまでの歩みを振り返ってみるにじゅうぶん値する永きである

う。ここ二三年われわれの「文明学会」では文学と文学学科の在り方についてのテーマがシンポジウムなどの課題にとり上げられるほどになっている。このことは文学学科内部からの自己検討の強い要求の現れであるといえる。あらためて文学とはどんなものが討議されてよい時である。

皮肉なことにもこのような内部からの自己改革の運動の兆しは、最近の大学設置審議会の答申案に促された日本の大学のカリキュラム改訂と自己評価の大きな流れの中に呑込まれようとしている。われわれのこれまでの積み重ねを無駄にしたいくないものである。われわれの経験に基づいて文学と文学学科をどのように方向づけるべきかという内部からの自己検討の運動はたとえその力が小

さくとも尊重されなければならぬであろう。たしかに一面では上記の、全国的な規模での大学におけるカリキュラム改訂の動きは文明学科の自己改革の試みをさらに促すことになるであろうと期待される。しかしそれはあくまでも外からの働きかけであることを忘れてはならない。自己検討と自己形成の試みはただ受動的にのみなされるものであつてはならないからである。

ところで今回のシンポジウムはすでに指摘したように文明学と文明学科の在り方を検討するというコンテキストにおいて計画されたものだろうと推察されるし、少なくとも討論からそれを期待することが許されるであろう。そこで基本的な問いかけとして二つの点を指摘してみたい。一つは、何が文明学であるのか、という点、そして第二は、文明学の対象である「文明」というものはどのような実在として肯定されるのか、という点である。

言うまでもなく、文明は自然の事実ではない。いわば自然の進化の過程のどこかで掘り出されるようなものではない。文明は自然に与えられたものではなく、人間の作為である。その限りで文明は反自然的なものでもありうると考えられる。文明は自然に対して在るという、このことから同時に、それは人間の意識の事実、すなわち mental facts であるということになる。そのように考えるならば、文明への問いかけは、人間の自然における営みへ向けられ、自らの営みがどのような実在であるのかが問われる。

文明学は学の対象としての「文明」を指定している。「文明」

という概念に拠って人間と自然が織りなす多様な事象を思考の俎上に載せるのである。そこでは、人間は文明を営む存在者であると考えられている。言うまでもなくそのような自覚なしにも人間は文明といわれるものを形成することができるし、しているのである。したがって文明というものを指定するのは自覚的に自らの営みを文明として捉えるという学的な営為である。そこで、当然のことながら、それは文明といわず、文化というべきであるという自覚的理解もありうるわけである。しかし、ここで問題となるのは文化と文明の差異についてでないことを断わっておこう。

何が文明学であるのか。ここで筆者は、福澤論吉の『文明論之概略』を念頭に置いて考えてみるのがよからうと思う。なぜならばこの『概略』は優れた〈文明学〉の構造を示していると考えられるからである。そこでまず考えられるべきはその問いを引き起こす関心は何か、それはどこに由来するのかということである。一般的に、いかなる学問的な問いかけといえども個人的・社会的な利害の絡む実践的欲求から自由であることはできない。しかし他方で、その実践的欲求は理論として、すなわち学問的な欲求に耐えうるものとして、構築されなければならない。このように実践的欲求の無い理論すなわち学問は、どこにも見いだされないし、考えられないのである。

福澤の文明学を生動させる問題関心は、まさに彼の生きた日本の文明であり、日本の独立の危機の克服であった。彼は日本を文

明という全体的な問題連関のものに据えるのである。その意味で文明を射程に捉える問題関心によってわれわれは文明という一連の問題連関のうちに置かれることになる。問題関心は日本という限定された地域に向かいながら、一般的に表現すれば、そこでは文明化という普遍的な価値が模索されているのである。したがって、何が文明学なのかを理解するために、われわれはどのような全体的問題連関のうちにあるのかを繰り返し確認することを求められる。このようにして、文明学に内在する実践的問題関心は一定の限定された地域研究にその一方の足場をおき、他方で「文明」という全体的問題連関を拓くことになる。

東海大学では文明学科を構成するにあたって大まかにヨーロッパ（東欧・西欧）アジア（日本・東・西・南）といった地域研究の枠を設定している。その枠組みを基礎づけているものは民族・文化の、そしてそれが自然との間に織りなす文明の諸相の独自性や差異性にあることはいくまでもない。しかし地域研究はただちに文明学と同一視されるものではない。そこから文明学にとって地域研究はどのように位置づけられるかが問題になる。すなわち、文明という全体的問題連関を形成する関心の中心が一定の地域の民族や文化の独自性にそってはじめに捜し求められる。したがってその問題連関は文明という、より広い全体的な問題連関に普遍化されるであろうと予想されているのである。

上述の意味で一般的には、文明学の問題連関は民族や文化の独自性や差異性、すなわちいわゆる地域研究の上にそれが形づく

れていくということが出来る。そこからいわゆる地域研究は文明学の出発点となる問題関心の土壌であるといえる。

「現代フランスにおける文明論」というわれわれのシンポジウムの課題はいかなる全体的問題連関を呈示してくれるのか。そこで予想されているフランスの文明とは何を言うのか。そこではどのような「文明」が予想されているのか。たしかにフランスの文明というものを想定することが許されるというのであれば、それはヨーロッパ文明に対してどのような自己主張をなし、何を訴えているのか。そのようにしてフランス文明のもつ文明としての普遍的で積極的なあるものが露にされることになる。

その際、問題連関を形成する個別の問題関心はまさに自由に設定されるものであろう。したがってモンテーニュやデカルトやルソーではなくて、フーコーやデリダ、ドゥルーズの問いかける独自の問題関心が、しかもそれが文明論的な問題連関に基づいている限りで、検討の主たる対象になるのである。文明学を制約するものはこの文明論的問題関心とその全体的連関を明らかにすることから始まると考えられる。したがってフーコーやデリダへの関心がどのような意味で文明論的であるのかが問題である。このことは、さらに積極的に言えば、フーコーやデリダのいかなる問題関心が文明論的問題連関を形成するのかという問いになるのである。

このように文明学を受けとめることは、すでにこれまでに築か

れた諸学の体系に対して批判的に対決する構えを取るようになる。なぜならば、文明学は歴史学である必要も、哲学でなければならぬ根拠も、あるいは他の自然ないし人間の諸科学と同じものであることも何ら要求されないのである。それにしても少なくともそれら諸科学以上のものであることが追求されているのであるが、フーコーやデリダへの問題関心がいかなる文明論的問題連関を形成し、それはどのようなものであるのか。

そこでもう一度文明学の対象である「文明」の実在性について論及しておこう。すでに述べたように文明というのは意識の事実である。それは自然と人間自身に開かれたシステムともいべき人間の営みである。そこで文明学的問題関心が自由に設定されるものであるということから、少なくとも文明学は対象を一定の限定されたものに求めることによつてではなく、ただ問題関心に從つて対象選択を行なうことになる。文明学にとつてすべてが選択の対象である。近代科学や先端技術、またそれを育んだ西欧文明が文明学の対象になるのは、対象そのものの必然性に拠るのではなく、まさにわれわれの文明論的問題関心に拠つてである。

その問題関心を問いただすのは問題連関の論理性である。文明論的課題選択の妥当性はそれがどのような全体論的問題連関を展開するかにかかっていると見える。そこで問題関心すなわち実践的欲求を学問の普遍性にたかめるものは論理的妥当性以外には考えられない。実践と理論のかかる相互補完の展開はとりわけ実践

の理論としての文明学の特徴を現わしているといえる。そこで個人的であれ、社会的であれ、あるいは権力的であれ、あらゆる形象の関心・欲求の内に問いかけてくるものは全体的問題連関を支える理論の一貫性である。